

近代朝鮮語学の開拓者・周時経の宗教遍歴 —大倮教との関係を中心に

佐々充昭

Abstract

Chu Sigyong (1876-1914) was one of the founders of modern Korean linguistics. He attempted to modernize Korean grammar while working as a proofreader for Independence Newspaper, the first Hangeul-only newspaper in Joseon. In 1900, upon graduating from the Methodist missionary school, Baejae Hakdang, he was baptized into Christianity and became a member of Jeongdong Church. Later, he became involved in the Korean Independence Movement under the leadership of Pastor Jeon Deokgi of Sandong Church. However, in 1909, when a new religious group called Daejyonggyo was founded, he became a follower. After the annexation in 1910, he participated in the cultural nationalism movement of Chosun Kwangmunhwe, which involved many Daejyonggyo believers. This paper examines the reasons why Chu Sigyong switched from Christianity to Daejyonggyo. Furthermore, it clarifies the influence of Dangun nationalism, advocated by Daejyonggyo, on Chu Sigyong's study of Korean Linguistics.

キーワード：周時経、培材学堂、尚洞教会、大倮教、朝鮮光文会

Keywords : Chu Sigyong, Baejae Hakdang, Sangdong Church, Daejyonggyo, Chosun Kwangmunhwe

I はじめに

朝鮮王朝第4代国王である世宗は1443年に朝鮮固有の文字を創製し、1446年に「訓民正音」として頒布した。その目的はあくまでも漢字の読み書きが出来なかった一般民衆の不便さを解消するためであった。両班と呼ばれた支配者階層の士大夫は「訓民正音」制定後も依然として漢字を使用し続け、朝廷における公的な書記手段も漢文であった。そればかりでなく、ハングルは「オンモン諺文」と卑称され、漢字が理解できない被支配者階層の簡便な俗語表記文字として位置づけられた。

これに対して、ハングルが朝鮮固有の文字として重要視されるようになったのは、1894年に行われた甲午改革の時であった。高宗は1894年11月に「法律勅令は、総て国文を以て本と為し、漢文の訳を附し、或いは国漢文を混用すべし」という勅令第1号を公布した。こうしてハングルは「諺文」から「国文」としての地位を確立し、ハングルを基本とする「国語 (national

language)」の創出が本格化した。このような認識の変化は、中国に従属する冊封体制からの脱却と独立主権国家への移行という時代状況を背景として、近代的な「国民国家」形成のための新たな「国民言語」が要求されたためであった（朴・鄭 2007：143, 156）。

このような近代的な「国語」の創出において重要な役割を果たしたのは周時経（1876～1914：号は한힌샘, 白泉など）である。周時経は培材学堂というミッション系私立学校に入学して言語学に関心を持ち、1896年に創刊された『独立新聞』国文版の制作に従事して以降、形態主義的な綴字法、漢字廃止と国文の専用、「ばらし書き〔폴어쓰기〕」の提唱など革新的な提案をした（愼鏞厦 1995:390）。現在、韓国の言語学史において、周時経は近代朝鮮語文法を体系化した開拓者・先駆者であると評価されている。

周時経の学統は現在のハングル学会に継承されていることもあり、韓国では周時経に関する研究が盛んに行われている。1976年には『周時経全書』上・下巻（李基文編、亜細亜文化社）が刊行され、1992年に『周時経全書』全6巻（金敏洙編集、塔出版社）が出版された。1988年には周時経研究所が発足し、同研究所から『周時経学報』という論文集が刊行され、ハングル学会からも1988年から2004年まで『한힌샘 周時経研究』という学術雑誌が刊行された。韓国では現在も言語学の分野を中心に周時経に関する研究が継続して行われており、膨大な研究成果が蓄積されている¹⁾。

その一方で、日本では周時経に関する研究があまり行われていない。例えば、朝鮮語の近代的規範化について論じた三ツ井崇（2010）は、朝鮮語学会の設立をめぐる議論の中で周時経について言及している。しかし、1933年の朝鮮語綴字法統一案に関する分析に重点が置かれており、周時経の思想を全面的に扱ってはいない。その他、野間秀樹（2010）や朴永濬・鄭珠里（2007）で周時経について述べているが、簡単な言及にとどまっている。

これに対して、本稿では周時経と宗教の関わりについて焦点を当てながら、周時経が晩年において大宗教に入信した事実について考察する。周時経は1900年に培材学堂を卒業する際にキリスト教の洗礼を受けた。しかし、1909年2月5日（陰暦1月15日）に独立運動家の羅喆（1863～1916）によって檀君教という宗教団体が創設されると、周時経はその趣旨に賛同して信者となった。この宗教団体は、古朝鮮の建国神話の中に出てくる「檀君」を精神的求心点として、朝鮮の国権回復と民族独立を達成しようとするものであった。1910年の韓国併合によって朝鮮が日本の植民地になると、朝鮮総督府の監視と弾圧を避けるために教団名を大宗教に改称し、1914年に教団本部を中国吉林省の間島に移転して抗日民族独立運動を展開した（佐々 2021）。

周時経が大宗教の信徒であったことは、研究者の間でよく知られた事実である。これに関して、歴史学者の愼鏞厦（1995）は、周時経による朝鮮語研究を「語文民族主義」と称しながら、周時経が旧韓末期に大宗教に入信した事実を明らかにしている。またイ・トクジュは、周時経の宗教遍歴に焦点を当てながら、キリスト教から大宗教へ改宗した問題について論じている。しかし、キリスト教の信仰・思想を中心に論じており、「周時経は晩年に大宗教に改宗したという記録があるが、これを裏付ける客観的な資料がないために断定することができない」（이덕주 1999:61）という懐疑的な立場から、大宗教に関しては詳しい考察を行っていない。これに対して、大宗教研究者であるキム・ドンファン（김동환 2013）やチョ・ナムホ（조남호 2015）は、抗日独立運動の観点から周時経と大宗教の関係について論じている。しかしながら、その考察

は主に大倭教側の資料に依拠したものであり、十分であるとはいえない。

本稿では周時経の宗教遍歴に関して、もともとキリスト教徒であった周時経がどのような事情で大倭教に改宗したのか、その経緯と理由について解明する。また周時経が残した資料の中から大倭教に入信していた事実を示す部分を抜粋し、大倭教が唱導した檀君ナショナリズムが周時経の朝鮮語研究にどのような影響を及ぼしたのか明らかにする。そして最後に、いわゆる「ハンゲル命名者論争」を瞥見しながら、大倭教の関与という新たな視点から、ハンゲル周時経命名説について検証する。

Ⅱ 培材学堂での修学と『独立新聞』の刊行

本章ではまず周時経がキリスト教に入信するまでの過程について概説しておきたい。1876年に黄海道鳳山郡で生まれた周時経（幼名は周相鎬^{チュサンホ}）は、ソウルの南大門市場で海陸物産の客主業（物々交換）を営んでいた叔父の養子となり、1887年に上京した。その後、1894年（数え年19歳）にソウルの貞洞^{チヨンドン}にある培材学堂に入学した。培材学堂は米国メソジスト教会のアペンゼラー（H.G. Appenzeller：1858～1902）宣教師によって1885年8月に設立された学校である。堂訓として「欲為大者、当為人役〔大きくなろうとする者は、他人のために仕える者にならない〕』という新訳聖書マタイ20：26の聖句を掲げたことから分かる（金世漢1965：107）、キリスト教に立脚した人材養成を目的に設立されたものであった。

周時経は1894年8月に培材学堂に正式入学して1895年6月まで通った（この時の科は不明）。その後、仁川官立利運学校に通った後、1896年4月に再入学して1898年6月に万国歴史地誌特別科を卒業した。そして同年に普通科に入学して、数学・英語・地理・歴史など西洋の新学問を学び、1900年6月に卒業した。この卒業式典で、周時経はアペンゼラーの執礼で洗礼を受けてクリスチャンとなり、貞洞メソジスト教会の教会員となった。当時、培材学堂の授業はすべて英語で行われ、また学生たちには礼拝が義務化されており、キリスト教の信仰が自然と身についていったものと考えられる。

周時経は培材学堂に在学中、培材学堂の教師であった徐載弼^{ソジョビル}や尹致昊^{ユンチホ}らと関わりながら、独立協会の運動に参加した。とりわけ周時経に大きな影響を与えたのが『独立新聞』の発行である。『独立新聞』の創刊に際して、徐載弼は自ら社長兼主筆をつとめる一方で、周時経を会計兼校補員に任命した。『独立新聞』は英語版と国文版が発行されたが、国文版は一般民衆が容易に読むことができるように、漢字を一切使用しない国文専用（純ハンゲル）とした。その校正係に周時経が抜擢されたのである。周時経は独立新聞社内に「国文同式会」を組織し、国文に関する本格的な研究を開始した。同会は『独立新聞』の廃刊によって中断されるが、周時経が自ら初めて立ち上げた語学研究会として、後の朝鮮語学会の淵源となった。

また培材学堂では、1889年に中国で長年宣教していたオーリンガー（Franklin Ohlinger）を呼んで学堂内に三文出版社（Trilingual Press）美以美印刷所（「美以美」はメソジスト〔Methodist〕の漢字表記）を設け、聖書をはじめとする各種キリスト教書籍を印刷した。メソジスト教会の会報誌『朝鮮キリスト人会報』や『天路歷程』『福音要史』のほか、『独立新聞』『協成会会報』『毎日新聞』などもここで印刷された（金世漢1965：12）。学堂長のアペンゼラーは、学資の調達が

難しい学生たちを印刷職工として働かせて苦学生を育てた。培材学堂に在学中、周時経もこの印刷所で働きながら学費を稼いだ（金世漢 1965：217, 268）。1895～1900年の間にここで印刷された各種のキリスト教書籍は、周時経の校閲・修正作業を経たものと考えられる（이덕주 1991：68, 이규수 2014：39）。

培材学堂を卒業した後、周時経は1904年に^{サンドン}尚洞青年学院の教師となるまで、5年間貞洞教会を中心に活動した。メソジスト教会系の保救女館（朝鮮最初の女性専用病院の中に設立された看護婦養成学校）の教師兼事務員として勤務した。また、1897年5月に米国メソジスト教会の韓国宣教会がソウルで開催され、朝鮮各地のメソジスト教会内にエプワース青年会（Epworth League: 懿法青年会）という青年連合会が組織されることになり、貞洞教会にもウォルン〔월은〕青年会がつくられた。周時経はウォルン青年会の人材局長（救済・救恤を担当する委員）をつとめた。1900年2月にメソジスト系の月刊雑誌として『神学月報』が創刊された。この雑誌は朝鮮最初の神学雑誌であり、ハングル専用文で編集された。周時経はこの雑誌に「言葉〔말〕」（1901.9, 「ソウル貞洞青年会祈禱会」に提出という注が付記）と「人の知恵と権力〔사람의 지혜와 권력〕」（1902.9）という論文を掲載した。また、スクラントン（William B. Scranton）牧師や多くの外国人宣教師に朝鮮語を教えた（이덕주 1991：72）。

このような活動を通じて、周時経は欧米宣教師による朝鮮語研究の成果を吸収していった。欧米の宣教師が朝鮮人に布教するに当たっては、必ず朝鮮語を研究し、これに習熟することが必要であった。また聖書を翻訳するには朝鮮語の理解が不可欠であった。周時経の朝鮮語研究は、日本人による朝鮮語研究にはみられない特徴がみられる。とりわけ、アルファベットへの強い拘りは、欧米キリスト教宣教師による朝鮮語研究の影響を受けたものであったと考えられる。これについて『培材 80 年史』には、周時経が培材学堂で英文を勉強した時に、「英文字の成り立ちがハングルを彷彿とさせ、英文法を説明する時にその理論がハングルにも応用し研究することができることを看破してから、ついに〔国文の〕研究に着手した」（金世漢 1965：269）と記されている。晩年に周時経がハングルの「横ばらし書き」を提唱したのも、アルファベットへの憧憬や、当時在米僑胞が開発したというタイプライターの使用を視野に入れたものであったと考えられる²⁾。

Ⅲ 尚洞青年学院における周時経の活動

1900年代の初め頃から、周時経は活動の拠点を尚洞教会に移していった。当時の尚洞教会には^{チョンドッキ}全德基（1875～1914）牧師という朝鮮人指導者がおり、彼によって一大民族運動の拠点となっていたからである。全德基は9歳の時に両親を亡くして孤児となり、南大門市場で炭売り商売をしていた叔父に引き取られて極貧の中で育った。17歳の時に米国メソジスト教会の宣教師スクラントン（Scranton, M. F.）の家を自ら訪れ、彼の家で雑用係として働くことになった。その4年後の1896年にキリスト教の洗礼を受けた。ちょうどこの頃、スクラントンは貧民が多く住む繁華街の南大門市場に尚洞教会を設けた。全德基は彼を助けて尚洞教会の宣教活動に尽力した。メソジスト教会のエプワース青年会の支部として、尚洞教会内に1897年にマラリー〔말랄리〕青年会が組織されたが（以下、尚洞青年会とする）、全德基は同会で主導的役割を果

たした。そして1898年に尚洞教会の属長（地区の運営責任者）に任命され、1907年に牧師の按手を受け、スクラントンの後に続いて尚洞教会の担任牧師となった。また、尚洞教会では附設の私立学校として1904年10月に尚洞青年学院が設立された。全德基は1903年に尚洞青年会の会長に就任した後、尚洞青年学院の運営において中心的な役割を果たした。

1905年に朝鮮が日本の保護国支配を受けると、尚洞教会は抗日民族運動の拠点となっていった。尚洞教会は米国メソジスト教会に連なる教会であり治外法権を持っていたために、日本が容易に手をつけることができなかった。そのために数多くの抗日人士が尚洞教会に参集し、全德基を中心として「尚洞派」と呼ばれる抗日民族運動の人脈が形成された（閔庚培 1981: 208）。1905年に乙巳条約締結が締結されると、全德基は条約反対を訴える上訴運動や抗議デモを展開した。また、1907年のハーグ密使事件においても尚洞教会の地下室でハーグへの密使派遣計画が立てられた。ハーグ密使の一人であり副使として派遣された李儁^{イジュン}は、尚洞青年会の外交部長と会長を歴任した人物であった。さらに、抗日民族運動の秘密結社として1907年に組織された新民会も尚洞派が深く関わった。新民会の創立メンバーの中で、全德基の他、李東寧^{イドンニョン}・梁起鐸^{ヤンギタク}は尚洞教会の教会員であり、尚洞青年会の会員だった（이현주 1998: 176, 186）。

周時経も尚洞教会と尚洞青年学院の独立運動に積極的に参加していった。周時経が全德基と少年時代から兄弟のように過ごした仲であったからである。全德基は南大門市場で炭売りをしていた叔父のもとで成長したが、周時経も南大門市場で海産物の客酒店主人をしていた叔父の養子となった。周時経が一歳下だったが、二人は友人のように親しく過ごした。あまりにも親しい仲だったためか、全德基と周時経は1914年の3月と7月に若い年齢で同時期にこの世を去っている³⁾。

全德基は周時経の朝鮮語研究を深く理解し、特に民衆への啓蒙活動を熱心に支援した。周時経も尚洞青年学院を自らの活動拠点とした。1904年の設立時から周時経は「国語」の教科を担当し、1905年9月には尚洞青年学院の学監に任命されている（1907年6月に辞任）。尚洞青年学院では、労働者や貧民のための夜学プログラムや様々な講習会プログラムが実施された。周時経は1907年11月に尚洞青年学院内に国語夜学科を設置して講師となり、朝鮮語の普及に昼夜を問わず活動した（한규호 2015）。

また、1907年から尚洞青年学院の中に夏期国語講習所が開設された。講習所は毎年夏に2ヶ月間開かれ、1914年までソウルや地方で6期にわたって開催され、毎回25～35人の卒業生を輩出した。1908年7月に開設された第2回夏期国語講習所の卒業生や有志が集まって、翌8月に国語研究学会が尚洞青年学院内に創設された。国語研究学会が附設した国語講習所（後に朝鮮語講習院に改称）からは多くの卒業生が輩出された。周時経の後継学者のほとんどがここの出身で、後日、彼らは朝鮮語学会の主軸会員となった。このように、尚洞青年学院は周時経にとって朝鮮語研究とその啓蒙運動の拠点的役割を果たし、後に朝鮮語学会へ続く周時経学派の淵源にもなった。

Ⅳ 周時経の大倭教入信

1 キリスト教から大倭教への改宗

周時経は貞洞教会で洗礼を受けたキリスト教徒であったが、晩年に大倭教に改宗した⁴⁾。これに関して、周時経の弟子であった金允経^{キムユンギョン}は次のような記録を残している。

先生〔周時経を指す：引用者〕は、宗教がイエス教であったが、この時、タブコル僧坊〔탑골승방〕から帰って来た後、全德基牧師に会って、「武力侵略と宗教的精神侵略とでは、どちらがより恐ろしいですか」と問うた時に、全牧師は「精神侵略の方がより恐ろしい」と言った。すると、〔周時経〕先生は「それでは、先生〔全德基を指す：引用者〕や私はすでに精神侵略をされた人であるので、このままでいるわけにはいかないではありませんか」と言った。全牧師は、「宗教の真理だけを受け入れるのであって、政策は受け入れなければよいのだ」と言った。しかし、先生は、過去に事大思想が宗教侵略の結果であることを述べ、従来为国教である大倭教へ改宗し、同志を集めようとして、崔麟やその他のいろいろな宗教の人々と運動を起こした。そのために、宗教人からは非難され悪口を言われた。〔中略〕この改宗は先生の愛国心によるものであった（金允経「周時経先生伝記」『全書』巻 6, 584）。

金允経自身が大倭教の信徒であったので（조남호 2015: 11）、この証言はかなり信憑性の高いものであると考えられる。

それではなぜ周時経はキリスト教から大倭教へ改宗したのか。この問題を解く鍵は、上の引用文の中で、全德基牧師が「宗教の真理だけを受け入れるのであって、政策は受け入れなければよいのだ」と答えた部分にあると考えられる。

1905 年に大韓帝国が日本の保護国となると、欧米の宣教本部は日本の保護国政策を容認する立場をとった（李省展 2006: 119）。周時経が所属したメソジスト教会に関していうと、1904 年に日本と韓国を管理する監督に就任したハリス（M.C.Harris）は日本に在住した親日家であり、初代韓国統監である伊藤博文の統治を「最大の賞賛を受けるにふさわしい」ものであると述べている（閔庚培 1981: 210）。このことを端的に示す事例として、1906 年に尚洞青年会が解散された事実があげられる。1905 年の乙巳保護条約締結時に全德基をはじめとして尚洞教会の青年会会員が条約に抗議する武力デモを行った。このことが口実になり、1906 年に開かれたメソジスト教会の韓国宣教年会で尚洞青年会の解散が決定されたのである。親日人士として有名だったハリスがこの年会を主宰したが、雑誌社のインタビューで青年会の解散理由について述べながら、「彼ら青年たちは、ともすれば、宗教集会を名目に国事を熱心に論じ、政治の得失を論じ、結局は紛糾を起こす恐れがあったため」と反感を露わにした（閔庚培 1981: 225）。

朝鮮の独立運動家は、このように日本の保護国支配を認め、個人の内面的信仰領域のみに宣教活動を留めようとした欧米宣教師たちの態度に反感を抱いた。そのために、独立運動家の羅喆によって大倭教が創設されると、教会の庇護下で抗日運動を展開していた多くのキリスト教徒が大倭教に入信していったのである。周時経もその一人であった。

2 併合前の周時経文献にみられる檀君言辞

周時経が大倭教に入信した事実は、周時経の論著からも確認できる。例えば、1906年に尚洞青年学院から刊行された『家庭雑誌』第1号（1906年6月発行）「百科講座：歴史」欄の中で、「桓因の息子の桓雄が太伯山（今の妙香山）の檀木下に家を造って住み檀君を生んだが、成長して徳があったので壬申年に王として立ち檀君となった」と説明している（『全集』巻6、256）。ただし、ここでは檀君と箕子を併記しながら古朝鮮の歴史を説くといった通常の歴史認識が述べられているだけで、檀君を特別に神聖視する意識はみられない。

また、1907年に大韓帝国政府の学部内に国文研究所が設置された。この研究所では、1909年まで10題のテーマについて審議し、最終的に決定した議定案を学部大臣に報告することで終結した。周時経もこの審議に中心人物として参画し「国文研究議定案」を提出している。その「第一回議定案（隆熙2〔1907〕年9月1日）」では、「檀君時代には文献があった痕跡が無く、文字の有無を考拠する道が無い」（『全書』巻2、437）と述べている。このことから1907年頃までは、檀君に対する特別な意識を持っていなかったことがわかる。

しかしながら、1908年以降になると檀君を朝鮮民族の始祖として神聖視する言辞が登場するようになる。ちょうどこの頃は、申采浩^{シンチェホ}の「読史新論」が『大韓毎日申報』に掲載され、檀君ナショナリズムが高揚した時期であった。周時経もこの運動に賛同して、徐々に檀君への関心を高めていった。例えば、1908年11月に刊行した『国語文典音学』では、その冒頭部分で「我韓の国語は檀朝開国後から四千余年のあいだ伝用してきた天然の特性をもつ独立した言語」であり、その「我が檀祖以来、徳政を行ってきた優等な言語と、子母の分別が簡要で記用が便利な文字」が、「開国四千年に研究が寂然として語典一卷も未だ成っていない」ためにこの書を著したと述べている（『全書』巻1、366～7）。

その後、1909年2月5日（陰暦1月15日）に檀君教が創設されたが、その重光式に参加したメンバーの中に周時経の名前はない。従って、周時経は教団創設当初の信徒ではなかったようである。しかしながら、比較的早い段階である併合前の時期に入信していたものと考えられる。このことは、1909年以降の著述において、随所で大倭教（当時は檀君教）の教理にもとづく記述がなされていることから推測できる。例えば、1909年2月に朝鮮語の初等教育用教材として著述された『国文初学』では、檀君を賛美する傾向が顕著に現れている。特に教材の第44課では、王儉が太白山檀木の下に生まれ、彼の父は桓雄、祖父は桓因であり、檀君は平壤に都を定め、国の名を朝鮮としたとし、江華摩尼山の三郎城や、檀君が子の夫妻を塗山に派遣した事跡などについて述べられている（『全書』巻6、241～2）。また、第45課では「檀君の時代に…我が国は天下で最も大きかった。…その子孫である王が千年以上、国を治めて栄えた。…いくつかの夫余国となり、高句麗の国となり、渤海となり、その北朝が末永く続いた。これは檀君の神聖なる功と徳が伝わったためである。檀君のように壮大な王は、昔から今まで天下に二人と無かった」（『全書』巻6、243～5）と述べられている。ここでは、歴史学者たちが提唱した「檀君＝夫余族正統論」を述べながら、檀君を至上無比の存在として賛美している点が注目される（佐々2001：53）。

さらに、1909年3月に発表された『国文研究』では、我族は長白山を中心とする四疆に蕃衍していたが、「遙かなる年代を経て、檀聖が君師の位に肇御し、この族を統轄して神聖なる政教

を行い、その業が数千年以上の長きにわたり、これに従って言語も高尚なものとなり、国文の本源も深遠である」と謳われている（『全書』巻2, 487）。ここでいう「檀聖」とは「檀君聖祖」を略した大宗教用語であり、また「神聖なる政教」とは檀君による政治と宗教、すなわち檀君教そのものを指していると考えられる。

また周時経は1910年4月に『国語文法』（京城：博文書館）を刊行した。本書の序文で次のように述べている。

国家の盛衰も言語の盛衰にあり、国家の存否も言語の存否にある。それ故に、古今天下の列国が各々自国の言語を尊崇し、その言語を記し、その文字を各自で制定するのである。…我国は檀聖が開国なされて以来、神聖なる政教を四千年以上にわたって伝えてきた。これは天然特性の我が国語である。本朝世宗朝の天賦の才をもつ大聖が、国語に相当する文字が無いことを憂慮され、国文二十八字を自ら制定された。その文字は簡便で〔あらゆる〕音を備え転換記用に通じたが、これは天然特性の我が国文である（『全書』巻3, 123～4）。

このように周時経は、「檀君」によって「天然特性の我が国語」が発生し、「世宗大王」によって「天然特性の我が国文」が制定されたと強調している。とりわけ檀君によって朝鮮語がもたらされたと定義しているのは、大宗教からの影響を受けたものであると考えられる。

Ⅳ 韓国併合後における周時経と大宗教との関係

1 朝鮮光文会の創設と大宗教

1910年の韓国併合後、朝鮮は日本の植民地となった。朝鮮のキリスト教会は朝鮮総督府と対抗関係にあったが、欧米のミッション本部は、保護国支配の時と同様に日本による植民地支配を容認する立場をとり、教会を存続させるために「政教分離」の原則を掲げながら「政治不干渉」の立場を貫いた（閔庚培 1981：271）。それに対して朝鮮総督府は、併合後の1911年8月に第一次朝鮮教育令、同年10月に私立学校規則、1915年に改正私立学校規則を公布した。当時の私立学校の多くはキリスト教系の学校で、一般民衆にハングルを教える朝鮮語教育が実施されていたが、これら朝鮮総督府の措置によりハングルの啓蒙・普及活動は大きな打撃を受けた（李省展 2006：193）。

その一方で、大宗教は朝鮮総督府の厳しい監視と弾圧を受けながらも果敢に抗日独立運動を展開していった。日本の植民地支配という困難な状況の中で、大宗教は単なる宗教団体ではなく、言語・歴史・宗教の三分野を大きな柱として「国語・国史・国教」の確立を目指す文化運動団体としての役割を果たした。そのために、1910年の併合を前後する時期に、朝鮮を代表する知識人が大挙して大宗教に入信した。例えば、1910年代における大宗教徒の名前を記録した資料をみると、^{カンウ}姜虞が主管した「南一道本司」所属の信徒として、^{キムユンシク}金允植・^{チソギョン}池錫永・周時経・^{ホンミョンヒ}洪命喜・^{アンジェホン}安在鴻・^{シンベグ}申伯雨・^{ナウンギョ}羅雲奎・^{アンホサン}安浩相・^{キムドゥボン}金料奉・^{チョンヨルモ}鄭烈模・^{シンソンモ}申性模・^{イグンノ}李克魯・^{ベクナムギョ}白南圭・^{ユグン}柳瑾・^{イヨンテ}李容兌・^{アンヒジョ}安熙濟・^{チョンインボ}鄭寅普・^{ミョンジュセ}明濟世・^{ソサンイル}徐相日・^{チョングアン}鄭寬・^{キムドクジョ}金斗種といった名前が記されている（玄圭煥 1967：569）。この中で特に注目したいのは、洪命喜・安在鴻・申伯雨・柳瑾・鄭寅普といっ

た歴史学者や、池錫永・周時経・金料奉・鄭烈模・申性模・李克魯・白南圭・明濟世・金斗種といった朝鮮語研究者の名前が記載されている点である。

そして、これら大宗教に入信した知識人の受け皿となったのが、朝鮮光文会であった。朝鮮光文会は朝鮮の古書を収集・保存・編纂・刊行することを目的として、1910年10月に崔南善^{チェナムソン}を中心に組織された団体である。朝鮮光文会の記録を見ると、同会の顧問及び従事として、朴殷植^{パクウンシク}・柳瑾^{キムギョホン}・金教猷^{イインスン}・李寅承^{ナムギウオン}・南基元^{イギョヨン}・周時経^{クォントツキョ}・金料奉^{イギョヨン}・李奎栄^{クォントツキョ}・権恵奎らが参画している。この中で李寅承と南基元の二名以外はすべて大宗教の信徒であった。これに関して、オ・ヨンソプは、朝鮮光文会を「朝鮮の歴史と言語と伝統を重視する文化的民族主義者たちの集合所として、大宗教的救国理念を掲げる大宗教共同体」であったと述べている（오영섭 2001: 110）。

そして、朝鮮光文会の朝鮮語関連事業で中心的な役割を果たしたのが、周時経とその弟子たちであった（愼鏞厦 1995: 428）。朝鮮光文会では、古書復刊事業の一つとして、崔世珍^{チェセジン}が1527年に著した朝鮮語の漢字学習書である『訓蒙字会』を1913年に公刊した。本書は、周時経が1908年頃に入手した本を底本としており、周時経による考校として「訓蒙字会再刊例」が巻末に付されている（『全書』巻4, 73）。その他、1911年から朝鮮語の国語辞典（『マルモイ [말모이: ことば集め]』）の編纂が始められた点も注目される。この事業は、周時経や弟子の金料奉・李奎栄・権恵奎らが編集に携わったが、この事業を主導したのは柳瑾であった。柳瑾は檀君教の重光式に参列した大宗教の幹部であった。大宗教の教団史によると、柳瑾は1911年に参教、同年6月に知教、1914年5月に尚教、1918年に正教に昇秩しており、教団幹部の姜虞と共に南道本司を主管した責任者であった（『大宗教重光六十年史』, 833）。この事業は周時経が1914年に亡くなって中断したが、解放後の1969年に李秉根^{イビョングン}によって『マルモイ [말모이]』の原稿が発見された。この原稿は1913年9月の草稿で、第1巻とみられる「가~갸측」部分をまとめたものであるが、冒頭の「凡例 [알기]」をみると、上段に「品詞」の略記表が、下段には宗教と学術分野の略記表が掲載されている。その中で宗教については、「大宗教・仏教・耶蘇教」の三つのみがあげられており、その中で大宗教が最初にあげられている点が注目される（『全書』巻4, 144頁）。

『マルモイ [말모이]』編纂事業の詳細については、周時経の弟子である李奎栄（1890～1920）が書き残した資料が参考になる。李奎栄は1913年に『オンガッコ [온갖것: すべての事]』という手稿本を書いている。本書は、冒頭に「4246年 [檀紀による年表示、西暦に換算すると1913年] 9月に朝鮮光文会朝鮮語字典を編輯する際に見聞きしたことを書き記す」（『全書』巻4, 469）とあるので、『マルモイ [말모이]』編纂に参加した際の備忘録として書かれたものであることがわかる。本書には「我々の言葉を思う歌 [우리 말 생각하는 노래]」という歌が掲載されている。その歌詞と訳文を記すと次のとおりである⁵⁾。

<우리 말 생각하는 노래>

ㅌ. 높이 솟은 흰 피 우에
넓고 크은 박달 나무
네즘해 앞 그 나무 밑
우리 한배 나리시엿네

<我々の言葉を思う歌>

高く聳える白山 [白頭山を指す] の上に
広く大きな博達木 [神檀樹を指す]
4千年前、その木の下に
我がハンベ [한배] がお下りになった

- ㄴ. 높이 솟은 세귀뫼에 高く聳える三角山に
 밝고 환한 한 가람가 明るく輝く漢江の岸
 다 온해 앞 그 땅우에 五百年前, この地の上に
 넷재 임검 생기시었네 四代目の国王〔世宗大王を指す〕がお生まれになった
- ㄷ. 우리 한배 말 내시고 我がハンベ〔한배〕が言葉を〔地上に〕もたらし
 넷재 임검글 지시니 四代目の国王が文字をお作りになった
 우리 곁에 말과 글이 我が民族の言葉と文字が
 이 땅 우에 첫재 가옵네 この地の上で第一番である
- ㄹ. 말내시온 우리 한배 言葉をくだされた我がハンベ〔한배〕
 글 지시온 넷재 임검 文字をお作りになった四代目の国王
 우리 곁에 즈글 속에 我が民族の千万〔人〕の中に
 골해 골해 깊이 새기세 万年, 万年, 深く刻まれん (『金書』 巻 4, 488 ~ 9)

キムミンス
 金敏洙によると、この歌詞は周時経か金料奉、あるいは李奎榮によって 1913 年頃に作られたものであるとされる (金敏洙 1980 : 72)。この歌詞では、檀君によって朝鮮語が生み出され、世宗大王によって朝鮮文字が創製されたという認識が示されているが、ここで特に注目したいのは「ハンベ〔한배〕」という用語である。これは、「檀君大皇祖」という漢字語を純ハングルで表した「ハンベコム〔한배검〕」を略したものであり、大倣教で創案された用語である (佐々 2021 : 353)。このような事実からも、朝鮮光文会における辞書編纂事業が大倣教の強い影響下で進められていった様子がうかがえる。

2 「ハングル」名称の命名者について

(1) 「朝鮮言文会 (배달말글문음)」の創設

大倣教思想からの影響は他にもみられる。それは「^{ベダル}倍達〔배달〕」という用語の使用である。併合後、1911 年に公布された第一次朝鮮教育令によって、朝鮮における「国語」が「日本語」であるとされた⁶⁾。これにより、それまで使用していた「国語」を植民地の地域言語として「朝鮮語」に言い改める必要が生じた。このような状況の中で、周時経は朝鮮語を守るために、漢字語に由来する言葉を廃して純粋な朝鮮言葉を使用するようになっていった。その典型的な例として 1911 年 9 月に「国語研究学会」の名称を「朝鮮言文会〔배달말글문음〕」に改称したことがあげられる。この名称変更は「国語」という用語が使用できなくなったことによるものであるが、その際、「朝鮮」を「^{ベダル}倍達〔배달〕」, 「言文」を「マルゲル〔말글〕」, 「会」を「モドゥム〔문음〕」として、すべての漢字語を純粋な朝鮮言葉に置き換えたのである。

ここで注目したいのは、「^{ベダル}倍達〔배달, 漢字に直すと倍達〕」という用語である。これは一般的に朝鮮民族を意味する古語であると理解されているが、筆者の調査によると、朝鮮半島と中国東北部 (満洲) を包含する民族概念として大倣教で新たに唱道された民族概念である (佐々 2021 : 310)。また、1911 年に「国語講習所」は「朝鮮語講習院」と改称されたが、その際に^{ナムヒャンノ}南亨佑 (1875 ~ 1943) が院長をつとめた。彼は^{ナムヒャンノ}大倣教の信徒であった。大倣教の信徒名簿をみると、「^{ナムヒャンノ}參教: 南亨佑, 癸, 三, 十五」(『倣門榮秩』 5 頁) と記録されている。これは「癸丑 (1913

年）陰暦3月15日」に「参教」の教秩に任命されたことを示している。入信してから参教に昇進するまでにはある程度の時間がかかるので、ちょうど朝鮮語講習院と改称された際に大倣教に入信したと考えられる。ちなみに、1916年からは柳瑾が院長をつとめている（『한글모듬보기』『講習院任員一覧』『全書』巻6, 429頁を参照）。

しかしながら、「ペダル〔배달〕」の使用はそれほど長くは続かなかった。「朝鮮語」は「ペダルマル〔배달말〕」, 「朝鮮文」は「ペダルグル〔배달글〕」に言い換えられたが、当時これらは大倣教徒の間だけで使用された用語であり、一般人には余り馴染みのないものであった点がその理由として考えられる。そのために周時経は、別の朝鮮言葉を使用するようになった。それがまさに「ハングル〔한글〕」である。以下ではこの用語がどのように登場したのか考察してみることしよう。

(2) 「ハングル」名称の使用について

韓国の学界では、「ハングル」という名称を最初に提唱したのは誰かという問題について長いあいだ議論が行われている。その代表格が高永根^{コヨングン}と任洪彬^{イムホンビン}である。両者とも候補者として、李鍾一^{イジョンイル}、崔南善、周時経、李奎栄の4名をあげているが、高永根（1983, 2003）は周時経説を主張し、一方、任洪彬（1996, 2007）は崔南善説を主張している。高永根によると、最初に「ハングル」という用語を使用したのは李鍾一（『帝国新聞』社長をつとめた言論人）であったが、明確な意味を持たせて使用したのは周時経であったとしている（高永根 2003）。これに対して、任洪彬は、最初の「ハングル」使用例としてあげられた李鍾一の「沃坡忘備録」（南広祐「訓民正音의 再照明」『水余成耆悦博士還甲紀念論叢』1989年所収）が後代の人物によって加筆・変改・翻案されたものであることを検証しながら李鍾一説を否定した。その上で、崔南善が「ハングル」という名称を最初に提唱したと主張している（任洪彬 2007）。

この両者の学説に関して、筆者は周時経命名者説がより妥当ではないかと考える。任洪水の説については、また後で検証することにして、ここでは高永根の説に従いながら、「ハングル」という名称がどのように作られていったのか考察してみたい。

先に述べたように、周時経は併合を前後する時期から、「朝鮮語」に代わる純粋な朝鮮言葉を模索していた。これと関連して注目したいのは、周時経が1910年6月に発表した「ハンナラマル〔한나라 말〕』という論説である。この論説は、普成中学校普中親睦会の機関誌『普中親睦会報』第1号に掲載したものである。周時経はこの論説の中で、「天然の言語」を使用してこそ「独立国」となると訴えたが、その際、朝鮮人が使用する言語について「ハンナラマル〔한나라 말〕」や「ハンナラグル〔한나라 글〕』といった表現を用いた（『全書』巻3, 256～7）。これらの用語は後に使われることになる「ハングル」とほぼ同じ意味で用いられている。

その後、注目すべきことが起こった。「朝鮮言文会〔배달말글모음〕」の名称が1913年3月に「ハングルモ〔한글모〕」に変更され、さらに翌1914年4月に「朝鮮語講習院」も「ハングルベコ〔한글배곧〕」に改称されたのである。現在までのところ、これが「ハングル」が最初に使用された例とされている。これと関連して、周時経の弟子であった李奎栄は1917年に『ハングルモの通史〔한글모듬보기〕』という手稿本を著している。本書は、周時経が創設した研究会と国語講習会の沿革について記録したメモ書きであり、紀元前2333年を基準とする「開極紀元（檀紀）」

を使用しながら、1907年から1917年までの10年間にわたる学会の歴史が記されている。その中で「朝鮮言文会創立記録〔한글모세움문음적발〕」をみると、檀紀4246年〔=西暦1913年〕3月23日に普成学校で開催された臨時総会において、「本会の名称を<ハングルモ〔한글모〕>と改称しようということを李奎榮が発議し、これを申明均が再請して可決」されたと記録されている（『全書』巻6, 410）。これを単純に読むと、「ハングル」の最初の提唱者は李奎榮ということになるが、師匠である周時経を差し置いて、弟子の李奎榮が会の名称を独断で提唱するはずがないので、李奎榮説は常識的に無理があると考えられる（この点に関しては、高永根も任洪彬も同じ見解である）。おそらく、周時経の発案を弟子が代理で提案したものと考えられる。

これ以降、周時経とその弟子たちは、「ハングル」という名称を前面に出すようになっていった。例えば、1913年に朝鮮光文会から刊行された『児童読本〔아이들 보이〕』という雑誌で「ハングル」という名称が使用された⁷⁾。『児童読本〔아이들 보이〕』では「ばらし書き〔풀어쓰기〕」で作成したハングル記事が毎月連載された。その記事の前ページには、読者のために「集め書き〔모아쓰기〕」した文が表記されているが、そこでは「ハングル解釈〔한글 풀이〕」と題されている。この欄の執筆者は周時経であると特定されていないが、周時経やその弟子たちを含む朝鮮光文会サークルの中で作成された実験的な記事とみなしてよいであろう。

以上のような根拠をもとに、高永根は「ハングル」名称の創作過程について、「한나라말／한나라글→한말→배달말글」を経て「한글」という名称が作られたと推測した上で、「ハングル」の命名者が周時経であったと論じている。その他にも、周時経の油印本『ソリガル〔소리갈〕』（著述年は1912～3年と推定）に「ハングル」が使用されている点、李允宰や権惠圭など周時経の直弟子の証言などを根拠としてあげている。

(3) 「ハングル」命名者論争についての考察

高永根が主張するハングル周時経命名説は至極妥当な見解であるように思われるが、これに対して、任洪彬は別の資料を根拠としながら、ハングルの名称は崔南善が朝鮮光文会で1910年10月から12月の間に提唱したものであると主張している（任洪彬 2007）。その根拠としているのが、崔南善が自ら語った次の回顧談である。

隆熙末年〔1910年〕に朝鮮光文会で朝鮮語整理について種々の計画をした時に、朝鮮文字を朝鮮語と称するのはどうであろうかということが一問題となったところ、ついに世界文字の中で最も神聖である王子という意味で「ハングル」と呼ぼうという意見が最も有力となった。「ハン〔한〕」は「大」を意味すると同時に「韓」を表示する言葉であるからである。後に周時経系統の朝鮮語学グループがこの名前を宣伝することに尽力し、…癸丑〔1913年〕に新文館から発行した児童雑誌である『児童読本〔アイドルボーイ〕』に「ハングル」欄を設けたことが、この名前を公的に使った初めてのことである。〔それと〕同時に、「ハングル」欄には字母分解による横書式の組版を初めて実施した（崔南善 1946：180）。

さらに、この回顧談を裏付けるものとして、正音派（ハングル学派とは異なる文法説を説いた学派）の代表者・朴勝彬^{パクスンビン}が述べた証言、すなわち「諺文」の名称を捨てようとしてその代用

語を考索する中で、崔氏から「ハングル」と命名し周氏もこれに賛同してその後から使用されたものである」(朴勝彬 1935: 30) という証言をあげている。これらの証言を元に、任洪彬はハングルの命名者が崔南善であると結論づけた。これに対して高永根は、崔南善がハングル学派(周時経派)から正音学派(朴勝彬派)に転向したことを根拠に、これらの発言が「正音学派(朴勝彬派)」に有利になるように発言した「偽証」であると反論をしている。

この問題に関して筆者は、崔南善の回顧談は「偽証」などではなく、事実を述べたものであると考える。先に述べたように、朝鮮光文会は大宗教と表裏一体の組織であり、それに所属する会員は強い絆で結ばれていた。「ハングル」の命名者は周時経であったが、朝鮮光文会の全体意思として崔南善がとりまとめをしながら、この用語を前面に押し出すように決定したのではないか、というのが筆者の見解である。いずれにせよ「ハングル」という名称は、「ペダルマル〔배달말〕／ペダルグル〔배달글〕」に代わる用語として提唱され、そこには「韓の文字（この場合の「韓」は、主権を失った大韓帝国を指すと考えられる）」「偉大な文字」「世界で一番の文字」といった大宗教流の檀君ナショナリズムが盛り込まれている点に留意すべきであろう。

このような大倣教からの影響は、周時経が1914年に刊行した最後の著書『言葉の音〔말의 소리〕』にも見てとることができる。本書の巻末には、「말의 소리의 곳에 두는 말〔『言葉の音』の終わりに置く言葉〕」という題目で「後書き」が述べられており、その末尾に「ㄷㅌㅇㅇ・한겨을날・말의・소리를・만든 한헌삼·쌤· 쌤」（『全書』卷3, 626）と記されている。ここには「ㄷㅌㅇㅇ」という記号が付されているが、これが何を意味しているのかは不明である。さらに、本書の最後には附録として「訓民正音」と「訓蒙字会例」が付されており、その後「 $\begin{matrix} \text{ㅌ} & \text{ㅇ} \\ \text{H} & \text{ㅇ} \end{matrix}$ $\begin{matrix} \text{ㅌ} & \text{ㅇ} \\ \text{H} & \text{ㅇ} \end{matrix}$ 」と題して、「ばらし書き」の実験のようなページが掲載されている（『全書』卷3, 640）。この表目を通常の文体に直すと「우리 글의 가로 쓰는 익힘」となり、日本語に訳すと「私たちの文字を横書きする練習」という意味になる。また、このページの最後に「ㄷㅌㅇㅇ스 ㅇㅌㅇ 거 H ㅌㅇ트ㅇ ㅇㅌㅇㅎ | ㅌㅇㅌ | ㅇㅌㅇㅌㅇ」と署名されている。このばらし書きの部分をもとめると、「한겨을날・말의・소리를・만든 한헌삼·쌤」という意味になるが、その前に「ㄷㅌㅇㅇ스」という意味不明な記号が付されている。

ここに出てくる謎の記号については、文脈上、本書が書かれた年代を示していると考えられるが、その正確な意味はまだ解明されていない。これに関して、高永根は「ㄷㄹㅇ」を「4358年」、「ㄷㄹㅁ」を「4359年」とする金敏洙の解釈を採用しながらも、その意味が何なのか分からない「解けない難問」としている。一方、任洪彬は前者を「1913年」、後者を「1914年」と解釈している。しかし、そのように考える根拠を何も示さないまま、ただ「周時経の年代計算法は履歴書のようによく間違える」と断定しているだけである⁸⁾。

この問題に関して、筆者は次のように考える。まず周時経はハングルの子音を「ㄱ ㄴ ㄷ ㄹ ㅁ ㅂ ㅅ ㅇ」の10個に整理したので、それぞれ1～10の数字に対応させると、「ㄱ」は「4」、「ㄴ」は「3」、「ㄷ」は「5」、「ㄹ」は「8」となり、「ㄷ ㄴ ㄷ ㄹ」は「4358年」を表していることになる。これは大倣教で使用されていた「開天紀元」の年を意味しているのではないかと考えられる。大倣教では、1909年の創設時に紀元前2333年を基準とする「檀君紀元（当初は「開極紀元」と称し、後に「檀紀」とも称される）」を使用した後、1910年に教団名称を変更した際に紀元前2457年を基準とする「開天紀元」を使用するようになった（佐々 2021：358）。こ

の「4358 年」が大倭教の「開天紀元」を用いた年であると仮定して、これを西暦に直すと「4358 - 2457 = 1901」となる。つまり、最初に出てくる署名は、「開天 4358 年〔= 西暦 1901 年〕の真冬日に〈言葉の音〉を書いた白泉〔周時経の号〕が記す」と解釈することができる。

また、その後に出てくる「ヨロロス」についても、同じ方法で数字に直すと「4359」となる。これは「開天 4359 年〔= 西暦 1902 年〕の真冬日に白泉が記す」という意味になる。つまり、本書が正式に刊行されたのは 1914 年のことであったが、原稿を書いたのは 1901 年から 1902 年頃にかけてであったことを示していると推測できる。それでは、なぜこのように数字をわざわざハングルで表記したのか。それは当時の出版事情によるものであったと考えられる。総督府による図書検閲が行われていた植民地期朝鮮において、大倭教の「開天紀元」年を記すことはできなかった。朝鮮の歴史が日本の歴史よりも遙かに古いことを示すことになってしまうからである。そのために、わざと暗号のようにハングル文字で「開天紀元」を表したのではないだろうか。このことはまた、周時経が大倭教徒であったことを示す明確な証拠となる。なぜならば、紀元前 2333 年を基準とする「檀君紀元（檀紀）」は当時の独立運動家の間で広く一般化していたが、紀元前 2457 年を基準とする「開天紀元」は大倭教徒の間だけで使用されていたからである。

Ⅵ おわりに

本稿を締めくくるに際して、最後に重要な問題についてとりあげたい。それは、周時経の大倭教改宗が果たして内的・信仰的な次元のものであったかどうかという問題である。これに関してイ・トクジュは、周時経が亡くなるまで尚洞青年学院、攻玉学校、培材学堂、梨花学校などキリスト教系私立学校の教師をつとめた点、また周時経の葬儀が 1914 年 7 月に京城の尚洞教会礼拝堂でとり行われた点などを理由として、周時経が最後までキリスト教信者であった可能性が高いと論じている（이덕주 1999: 61）。

この問題に関しては、大倭教の特殊性に考慮する必要があるだろう。大倭教は 1909 年に創設された民族宗教団体であり、近代的な「宗教」教団としての外形を整えたのは朝鮮総督府が 1915 年に定めた「布教規則」への対応がきっかけであった（佐々 2021: 394, 516）。また、1910 年代は寺内総督のもとで武断統治が行われており、「大倭教人には自由がない」と言われたほど厳しい監視と弾圧を受けていた。とりわけ周時経が死亡した 1914 年は、大倭教の総本司（本部）が中国領内に移転された年であった。この時はまさに大倭教徒が続々と海外亡命している時期であり、総督府の看視はとりわけ厳しいものであった。これに関して、大倭教教主の羅喆は 1916 年に中国へ渡るための旅券を申請したが認可されず、日本に抗議するために黄海道九月山の三聖祠で自死を遂げている（佐々 2021）。このような状況の中で、周時経のような著名な独立運動家の葬儀を大倭教で行うのは教団として非常な危険が伴い、事実上不可能であった。実際、周時経の葬儀には、遺族、宗教人、教育家、学生ら 300 名が参列し、新聞に報道されるほど社会的に大きな注目を集めた。また尚洞教会は、周時経の親友であり同志でもあった全德基牧師が牧会していた教会であった。様々な事情を考慮して、それまで本人や遺族が慣れ親しんできた尚洞教会で葬儀を行ったものと考えられる。

これと関連して最後に言及しておきたいことは、周時経の死亡経緯についてである。周時経

は1914年に中国への亡命を決意したが、その理由について金允経は次のように述べている。「国運が傾き始めた頃から同志たちが一人二人と外国へ亡命し、また併合の翌年に寺内〔総督〕暗殺陰謀という捏造された「105人事件」によって獄に繋がれ、心を打ち明けて語る同志もなく、…意志する目的を完遂しようと外国への亡命を決意した」（김윤경 2016: 45）。この亡命計画も大倣教との関連の中でなされたものであると考えられる。先に述べたように、中国領内への教団本部移転が行われた1914年を前後する時期に大倣教徒たちは続々と海外へ亡命した。その代表的な人物として、李東寧^{チョソンファン}、曹成煥^{イフエヨン}、李会栄^{イフエヨン}をあげることができる。彼らは尚洞教会に通ったキリスト教の信者であり尚洞青年会の会員として周時経とは昵懇の仲であった。彼らはまた新民会の会員であったが、「105人事件」を機に中国へ亡命した後、大倣教に入信した（佐々2005）。このような流れの中で、周時経も彼らと同様に、朝鮮総督府の監視の目を逃れて自由な朝鮮語研究を行うために中国に亡命することを決心したと考えられる。なお、金允経の記録によると、周時経は「1914年に夏休みを利用して故郷である平山へ行き親兄弟に別れの挨拶をした後、ソウルに戻って亡命に旅立とうとしたところ、急に滞症〔消化不良〕を患いその2ヶ月後の7月28日に38歳の若さで別世してしまった。…先生〔周時経〕の急死については、倭政〔朝鮮総督府を指す〕が主治医師に指示したある種の黒幕があったためであると言われている」（김윤경 2016: 46）と記されている。

大倣教は、個人の内面的・靈的救いを求める宗教団体というよりは、朝鮮の国権回復と民族独立という政治的な目標を達成するための抗日独立運動団体であった。1910年の併合後、大倣教は「国語・国史・国教」の定立を目指し、言語学（朝鮮語研究）と歴史学（朝鮮史研究）と密接に連動し合いながら、学術分野において「国魂（national identity）」を定立させる文化ナショナリズム運動を展開していった。併合後に崔南善が設立した朝鮮光文会がその活動拠点となった。周時経も朝鮮光文会の活動に積極的に関与し、言語研究を通じたナショナリズム（語文民族主義）をより先鋭化させていった。日本による植民地支配という時代状況の中で、朝鮮語研究を守る「保護膜」として、大倣教流の檀君ナショナリズムが要請されたといえるであろう。

そしてまた、周時経の大倣教入信は、植民地期朝鮮における「ハングル学派（＝周時経学派）」の形成という点からも重要な論点を提示してくれる。周時経の遺志を継ぐ弟子たちは1921年に朝鮮語研究会を組織し、それを改称して1931年に朝鮮語学会を発足させた。朝鮮語学会では、その歴史的系譜を「国文同式会（1896年）－国語研究学会（1908年）－朝鮮言文会〔배달말글문음〕（1911年）－ハングルモ〔한글모〕（1913年）」にあると見なしている。このような系譜を持つ学派が形成された重要な要因の一つとして、周時経の弟子たちが大倣教に入信していったことがあげられる。周時経の死後、その研究と事業を継承した金科奉をはじめ、李奎栄、権恵圭、李秉岐^{イビョンギ}、申明均^{シンミョングン}、崔鉉培^{チュヒョンベ}、鄭烈模^{チョンヨルモ}、李克魯^{イユンジェ}、李允宰^{ハンジン}、韓澄^{イジュンファ}、李重華らは皆、大倣教徒であった。朝鮮語学会にも、李克魯や崔鉉培をはじめ多くの大倣教徒が参与している。

彼らは周時経と同様に、大倣教に所属しながら、朝鮮語研究を通じた民族主義運動を展開しようとした。その際、周時経の弟子たちは「ハングル」という名称を使用し、そこに朝鮮民族の尊厳を込めようとした。この名称は、朝鮮語への弾圧という時代状況の中で、「諺文」「国文」「正音」といった漢字語に代わる、純粹な朝鮮言葉が何かという苦心と模索を通じて、周時経とその弟子たちによって考案されたものであった。その後、周時経による朝鮮語研究の成果は、「ハ

ングル派」という名称のもとに、大倭教という一種の精神的「保護膜」の中で、大倭教の言語学者によって死守され継承されていく。これについては、また稿を改めて論じることとしたい。

注

- 1) 周時経の経歴と研究業績については、『周時経全書』巻6所収の、金敏洙「周時経の生涯」「周時経年譜」「周時経論著目録」、高永根「周時経研究の昨日と今日」、李炫熙「周時経研究論著目録」、高永根「周時経追慕日誌」を参照。以下、本稿では本書を『全書』と略記し、本文中に巻数と頁数のみを記す。
- 2) 『皇城新聞』1909年7月21日付、論説「国文機械新文明」では、サンフランシスコに居住する僑胞学生の子振が初めて国文打字機を発明したことが報じられている。周時経はこの事実を知って、朝鮮語の書き方が将来機械でされることを見越して、ハングルの横ばらし書きを実験したものと考えられる(愼鏞厦 1995: 415)。しかし、この記事が事実であったかどうかは確認されておらず、在米僑胞の事業家・李元翼がアメリカで1914年に作ったハングル打字機が最初の朝鮮語タイプライターとされている(김태호 2011: 410)。
- 3) 全德基牧師は1911年から肺結核に苦しみ、1914年3月23日にソウルで病死した。享年39歳であった。その後を追うかのように、周時経も同年7月28日に急死している。
- 4) これに関して、言語研究者の間では、周時経が1907年に大倭教に改宗したという説が一般化している(例えば、「周時経年譜」『全書』巻6、673や이덕주 1999: 65など)。何を根拠にしているのかは不明であるが、檀君教が創設されたのは1909年であり、大倭教に教名改称したのは翌年1910年であるので、これは誤りである。
- 5) 歌詞の訳文については、(金敏洙 1980: 71)の現代訳語を参照した。
- 6) 第一次朝鮮教育令では、第2条で「教育勅語」にもとづく「忠良なる国民」の養成が掲げられ、第5条では「普通教育は普通の知識機能を伝授し、特に国民らしい性格を涵養成し、国語〔日本語を指す：筆者注〕を普及することを目的とする」とされた。また「朝鮮語及漢文」という科目が設置されたが、第10条に「朝鮮語及漢文を授くるには常に国語と聯絡を保ち時としては国語にて解釈せしむることあるべし」というように、「朝鮮語」は「国語(=日本語)」教育のための補助手段とされた。
- 7) 『児童読本〔아이들 보이〕』総13号のうち、「ハングル解釈〔한글풀이〕」欄は、第6号(1914.2)～第13号(1914.10)の7回にわたって連載された(권두연 2015: 13)。
- 8) これに関しては、金世漢も、周時経が「檀紀の計算方法を間違えた」として、この年を1913年であると述べている(金世漢 1974: 190)。

参考文献

(日本語)

- 佐々充昭 (2001) 「韓末における檀君教の「重光」と檀君ナショナリズム」『朝鮮学報』第180輯
- (2005) 「亡命ディアスポラによる朝鮮ナショナル・アイデンティティの創出—大倭教が大韓民国臨時政府運動に及ぼした影響を中心に」『朝鮮史研究会論文集』第43集
- (2021) 『朝鮮近代における大倭教の創設：羅喆の生涯と檀君教の再興』明石書店
- 野間秀樹 (2010) 『ハングルの誕生』平凡社
- 関庚培 (1981) 『韓国キリスト教会史』新教出版社
- 朴永濬・鄭珠里著、柴政坤・中西恭子訳 (2007) 『ハングルの歴史』白水社
- 三ツ井崇 (2010) 『朝鮮植民地支配と言語』明石書店
- 李省展 (2006) 『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代：ミッションスクールの生成と植民地下の葛藤』社会評論社

（朝鮮語）

- 高永根 (1983) 「‘한글’의 유래에 대하여」『白石趙文濟教授華甲紀念論文集』
- (2003) 「‘한글’의 作名父는 누구일까: 이중일・최남선 所作설과 관련하여」『새국어생활』 13 (1)
- 권두연 (2015) 「근대 매체와 한글 가로 풀어쓰기의 실험」『서강인문논총』 42
- 김동환 (2013) 「한국종교사 속에서의 단군민족주의-대종교를 중심으로」『仙道文化』 15
- 金敏洙 (1980) 「李奎榮의 文法研究」『韓國學報』 19
- 金敏洙編 (1992) 『周時經全書』 全 6 卷, 塔出版社
- 金世漢 (1965) 『배재 80 년사 (창립 80 주년 기념증보판)』 학교법인 배재학당
- (1974) 『周時經伝』 正音社
- 김윤경 (2016) 『주시경선생전기』 열화당 (初版は『한글』 126, 한글학회, 1960, 『周時經全書』 卷 6 に原文掲載)
- 김태호 (2011) 「‘가장 과학적인 문자’와 근대 기술의 충돌: 초기 기계식 한글 타자기 개발 과정의 문제들 1914 - 1968」『한국과학사학회지』 33 (3)
- 大倣教倣經倣史編修委員會 (1971) 『大倣教重光六十年史』 大倣教總本司
- 大倣教總本司所藏『倣門榮秩』(書誌事項未詳)
- 朴勝彬 (1935) 「朝鮮語學會 査定 ‘한글 맞춤법 통일안’에 대한 批判 (1)」『正音』 10, 朝鮮語學硏究會
- 愼鏞厦 (1995) 『韓國近代社會思想史硏究』 一志社
- (1994) 『獨立協會硏究』 一朝閣
- 오영섭 (2001) 「朝鮮光文會硏究」『한국사학사회보』 3
- 李光麟 (1978) 「徐載弼의 開化思想」『東方學志』 18
- 이규수 (2014) 『한글에 빛을 밝힌 어문민족주의자: 주시경』 역사공간
- 이덕주 (1998) 「전덕기의 생애와 사상」『나라사랑』 97, 외솔회
- (1991) 「주시경의 종교 행적과 신앙」『한한샘 주시경연구』 4, 한글학회
- 이현주 (1998) 「상동 청년회와 전덕기의 민족 운동」『나라사랑』 97, 외솔회
- 任洪彬 (1996) 「周時經과 ‘한글’ 명칭」『韓國學論叢』 23, 啓明大學校韓國學硏究院
- (2007) 「‘한글’ 命名者와 史料 檢證의 問題 - 고영근 (2003) 에 답함」『語文硏究』 35 (3)
- 조남호 (2015) 「주시경과 제자들의 단군에 대한 이해」『仙道文化』 19
- 崔南善 (1946) 『朝鮮常識問答』 東明社
- 한규무 (2015) 「상동청년학원 연구 (1904 ~ 1913)」『서강인문논총』 42
- 玄圭煥 (1967) 『韓國流移民史』 上卷, 語文閣

